

第三十五回和辻哲郎文化賞 一般部門受賞作

多胡 吉郎 著『生命の<sup>いのち</sup><sup>こだま</sup> 川端康成と「特攻」』

(2022年2月28日刊 現代書館)

多胡 吉郎 たご・きちろう

作家

1956年(昭和31年)5月1日生まれ 66歳 東京都江戸川区出身

専門は、ノンフィクション、小説、評論、エッセイ

1980年、東京大学文学部国文学科 卒業(学士号取得)。日本放送協会(NHK)入局。NHK北九州放送局に勤務(～1984年)。1984年、東京の放送センター勤務となる。以後、ディレクター、プロデューサーとして、文化教養系の番組を中心に多くの番組制作を手掛ける。1987年、鹿屋市の同人誌「火山地帯」の同人となる。途中出入りはあったものの、現在も同人であり続けている。1992年、ハイビジョン番組『Beijing』により、国際エレクトロニクス・シネマ・フェスティバル奨励賞を受賞。1995年、韓国放送公社(KBS)との国際共同制作により、NHKスペシャル『空と風と星と詩～尹東柱・日本統治下の青春と死～』を構成・演出。1999年、ロンドン勤務となる(NHKエンタープライズ・ヨーロッパ)。欧州各地の現地プロダクションとともに、主に衛星放送の番組を制作。2002年、帰国命令が出たのを機にNHKを退職、イギリスに留まって文筆の道に進む。2003年、『吾輩はロンドンである』(文藝春秋、2003年8月8日刊)により作家デビュー。2009年、イギリス生活が10年に及んだのを機に日本に帰国、現在に至る。

主著に、『スコットランドの漱石』(文春新書、2004年)、『リリー、モーツァルトを弾いて下さい』(河出書房新社、2006年)、『わたしの歌を、あなたに 柳兼子、絶唱の朝鮮』(河出書房新社、2008年)、『物語のように読む 朝鮮王朝五百年』(角川書店、2012年)、『海を越え、地に熟し 長澤鼎・ブドウ王になったラスト・サムライ』(現代書館、2012年)、『漱石とホームズのロンドン 文豪と名探偵・百年の物語』(現代書館、2016年)、『生命の詩人・尹東柱 『空と風と星と詩』誕生の秘蹟』(影書房、2017年)、『空の神様けむいので ラスト・プリンセス徳恵翁主の真実』(影書房、2021年)など。最新刊に『猫を描く 古今東西、画家たちの猫愛の物語』(現代書館、2022年)がある。

## 受賞のことば

私は22年間勤めたNHKを早期退職し、文筆の道に進みました。番組制作を通じ多くを学びましたが、カメラで切り取られた世界だけでなく、フレーム外に広がる物の中に真実を見出したいと思ったのです。爾来20年、情熱だけを頼りに走り続けて参りましたが、単行本14作目にして漸く世の中に認めて頂けることになりました。しかも和辻哲郎という知の巨人の名を冠した名誉ある賞とあって、まさに感無量です。

川端康成が海軍報道班員として鹿屋の特攻基地に滞在したのはひと月ほどですが、生と死の垣塙のような極限の場に身を置いたことが、戦後の川端文学に影を投げかけ哀しみの色を深くしました。これ迄の研究で空洞化していた川端の「特攻」体験の意味を、拙著は綿密な調査と大胆な想像力により突き詰めたものです。目をしかと見開き心を澄ます…。栄えある賞の受賞を励みとしつつ、初志を忘れず精進を重ねる覚悟です。この度は誠にありがとうございました。

## 《選考委員評》

阿刀田 高

書かれてないことの意味

川端康成と言えば、たとえば青春の恋情を描いた『伊豆の踊子』、あるいは情緒豊かな『雪国』そして日本の伝統美に因んだ『千羽鶴』など名作が思い浮かび、ノーベル文学賞の受賞者でもある。『山の音』のような死の気配を偲ばせる作品もあるし、自死のいきさつもよくわかっていない。国民的作家でありながら<sup>とうかい</sup>韜晦の気配なきにしもあらず。1945年4月～5月、敗戦の少し前に海軍報道班員として鹿児島の特攻基地に赴き、そこで死に行く若人たちに接し、なにを感じ、なにを思ったか、このいきさつはあまり知られていない。識者からは「もっと語るべきだ」という指摘もあった。

川端康成は幼少期に父を失い母を亡くし、祖母も祖父も早くに没している。死は身近にあった。文学者として特攻の死をどう見たのか。短期間の、不十分な接触であったが、私たちにとってもう少し知りたいところがあるのは本当のところだ。

受賞作『<sup>いのち</sup>生命の<sup>こだま</sup>砦』はそれに応えるものである。著者の多胡氏は永らくNHKの報道番組に関わった才腕の作家であり、このレポートでは多くの資料を質ね、入念に綴られている。読んで眼からうろこのところがたくさんあった。

川端にとってこの体験が後の作品にどう影響したか、直接綴ったものは少ないが、それとはべつに、——どこかで通底する作品が、作品の数行があるにちがいない——

文学者への関心として、これは当然あってしかるべき興味だが、このあたりは川端康成の場合とりわけむつかしい。本書の著者も踏み込み、踏み込みかねているところもあって、もどかしい。川端の島木健作への追悼文の一節“私はもう死んだ者として、あわれな日本の美しさのほかのことは、これから一行も書こうとは思わない”などの紹介で“なるほど”と思ったりもした。選考を離れて心に染みる読書であった。

辻原 登

この作は、「川端」と「特攻」を繋げ、幾つかの補助線を引きつつ<sup>ふせん</sup>敷衍することで、川端康成という「人間」、「文学」を<sup>うた</sup>謳い上げようとするのだが……。

「体験」とは何か。川端は特攻に参加したというのと、通常の「体験」はかなりニュアンスが違う。

例えば、『出発は遂に訪れず』の島尾敏雄は確かに「特攻」に参加した。

川端は昭和20年4月、特攻隊基地鹿屋飛行場にいた。海軍報道班員として、一カ月ほど滞在した。

著者は、神山圭介の『鶴色の武勲詩』を援用しながら、川端の特攻「体験」に迫る。『鶴色の武勲詩』は神山の実兄金子照男が鹿屋基地から飛び立って死んだ足跡を追う小説だが、基地で金子と川端の出会いも描かれていて、読ませどころでもある。

著者はそのエピソードを紹介しながら、隊員たちの髪を刈りにやってくる散髪屋の少女「シイちゃん」に、川端が「わたしも刈ってもらえますか……。わたしだって、いつ死ぬかわかりませんから……」と言う。

このエピソードをもとに著者は、川端は、特攻隊員の死と想念としての自己の死を重ねようとした、と述べる。さらに、『雪国』のラスト、炎の中から落下する葉子と、特攻の死を二重写しする展開に至っては、私はどうしても違和を覚えてしまう。

とまれ、川端が抱えた悲しみの質、その悲しみの核心に「特攻」体験を据えようという大胆な仮説は、殆んど川端論から抜け落ちているか、無視されて来たもので、著者の勇気は貴重なものである。

## 山内 昌之

### 川端康成と少年特攻兵

山岡荘八と海軍特攻隊とのつながりなら、漠然とイメージできる人も少なくない。しかし、川端康成と海軍鹿屋基地との関係を理解できる人は少ないだろう。この二人は、一緒に鹿屋にいて、特攻隊を見送った文士たちなのである。川端は、少年飛行兵が出征に際して叔父へ述べた言葉を、詩のように整える仕事までしている。戦闘機に乗る自分が死ぬのは、ただ三つの場合だけだというのである。

第一は、戦闘中に頭から心臓までのどこか致命的な場所を敵弾にやられたとき

第二は、戦闘中に敵の飛行機に愛機をぶっつけて行った場合

第三は、敵の軍艦なり、地上の目的物なりに、突っ込んで自爆した場合

川端は、少年兵の文章にふさわしく「ぶっつけて行った」とか、「突っ込んで」とか、わかりやすい表現を用いている。それだけに、少年兵の気持ちを掴もうとする川端の心根もいやというほどよく出ている。

川端は、抹茶茶碗で茶を喫してから飛び立った士官にも触れている。裏千家家元の千玄室氏はたびたび鹿屋を訪れ、この茶碗で茶を点てることもよくあった。著者によれば、千氏は海軍予備学生であ

り、特攻飛行士を通して川端との縁もあったというのだろう。

川端は、事件ないしは事件との出会いが体験として創作に大きな刺激を与えていた。川端は、特攻の悲痛な体験を自らのものにしなが、その後の創作の基礎においたのかもしれない。誰もが考えなかった組み合わせから文学と歴史の暗合を読み解いた作品として、本書は和辻哲郎文化賞の受賞に値するだろう。